オキナワをめぐる戦後と冷戦を問う

——孫知延著『戦後オキナワ文学を思惟する方法——ジェンダ、エスニック、そしてナショナルアイデンティティ』（召命出版、2020年）

Hyoungduck KWAK (郭炯徳 : Assistant Professor of Dept. of Japanese Language and Literature Myongji University)

✉ kwak202@gmail.com

(韓国) 明知大学校日語日文学科。助教授。戦時期の日本文学からはじめ、現在は戦後日本のマイノリティーに注目する研究を進めている。『金史良と日本帝国主義末期の植民地文学』（ソウル：召命出版、2017）、『オキナワ文学選集』（ソウル：召命出版、2020）、『大東亜文学者大会会議録』（ソウル：召命出版、2019）など。

An Analysis of the Post-war Conditions of Okinawa and the Effects of the Cold War on the Island

Son Jiyon's "Contemplating Post-War Okinawan Literature : Gender, Ethnicity, and National Identity" criticizes the East Asian framework for understanding, and delves deeply into the intersection of postwar conditions and the Cold War in relation to Okinawa, through an analysis of various texts. As the author suggests, the situation of Okinawa is a microcosm of wider problems that are prevalent in the consciousness of East Asia as a whole, and which therefore can be understood at a fundamental level by Koreans, because they overlap with the contradictions thrown up by war and division in South Korea.

Keywords Okinawan Literature, Oshiro Tatsuhiro, East Asian Writers

韓国でオキナワ文学が本格的に翻訳されてから十年以上の年月が経った。その間、さまざまなオキナワ文学選集が出され、研究書としても『二つの島：抵抗の両極、韓国と沖縄』（李明元著、サムチャン、2017）や『沖縄を読む：戦後の沖縄文学と思想』（趙正民著、召命出版、2017）などが刊行された。2020年に刊行された孫知延の『戦後オキナワ文学を思惟する方法』はこれらの研究書と同じようにオキナワ文学を日本だけではなく、東アジアという枠組みの中で問うている。ただ、本書は東アジア自体を媒介にその枠組み自体に強くこだわっている。本書に収められている佐藤泉との対談の中で東アジアを日本の帝国主義が作り出した秩序であると同時に、その負の遺産を受け継いだ反共産主義のブロックとして定義する箇所は東アジアの両義性を語る上で重要な指摘である。冷戦が解体された後、「東アジア」は脱冷戦の言説として浮上したが、帝国主義の残影が色濃く残されていたからである。ただ、本書の意義は東アジアの傷痕を可視化させたところにあるというよりは、類似性を強調しすぎてないところにある。言い換えれば、韓国とオキナワの類似した歴史を意識しつつも、それに包摂されず、日本本土とオキナワ、そして韓国とオキナワ、済州島とオキナワの戦後と冷戦の交差を著者は緻密に読み取っている。その中でも「戦後と冷戦」、そして「占領とジェンダ」は本書の最も重要なキーワードである。

1 戦後と冷戦

最近「戦後ゼロ年」という用語が日本のテレビでよく使われている。この時の戦後という時間・空間を生きた人々は秩序のない世界ではあるものの新しい生活への希望に満ちている。まさに本土の戦後である。本土において「戦後ゼロ年」とは廃墟となった国土を民衆のエネルギーによって復興させはじめた起点として語られる。しかし、オキナワにおいて「戦後ゼロ年」とは戦後を数えることはできないと言う存立不可能性を語る場合に用いられる。目取真俊は『沖縄「戦後」ゼロ年（生活人新書）』（NHK出版、2005）において戦後がオキナワで存在してなかったという意味で「戦後」ゼロ年」という概念を持ち出す。本土とオキナワにおいて真逆の意味で使われる「戦後ゼロ年」は、ナショナル・ヒストリーによって忘却されたマイノリティーの苦痛の時間と空間を想起させる。ただ、著者はその「忘却」自体ではなく、それを可能にした「冷戦」と「戦後」の関わりに集中して論を展開している。

著者は第一部と第二部、「辺境の記憶」と「アイデンティティの交錯の場」の中で、本土とオキナワにおいて敗戦と戦後が如何に違ったかをさまざまな例をあげながら論証する。著者はオキナワにおける敗戦の空間を「国家」なき「敗戦」空間」として定義し、本土を中心とする国家中心の敗戦空間論を批判する。「国家」なき「敗戦」空間」を生きるウチナーンチュにおいてもっとも切実に感じられたのはアイデンティティのより所であった。著者は第二部において日本とアメリカ、そして沖縄の間で揺れる彼・彼女らのアイデンティティを、大城立裕の初期小説とうちなーぐちの使い方を中心に深く読み取っている。

2 占領とジェンダ

本書のもう一つの軸は占領とジェンダの関わり方である。第三部「ジェンダで読むオキナワの占領叙事」を貫く問題意識は敗戦と占領によってもたらされた男性たちの屈折された心理と女性の貞操をめぐって繰り返される国家的なレベルでの貞操観念の復活である。著者は菊池寛の「貞操について」において「進駐軍」に性を売る日本人女性を恥として批判していることに注目し、「未亡人」・「国家」・「母性」の問題が戦後においてより強力な「国家的な母性」の創出につながっていると指摘する。そして戦後文学において描かれた「国家的な危機＝女性の性的危機」の中にアメリカによって占領されたオキナワとオキナワ女性の危機が徹底的に隠蔽されていることまで論を展開する。さらに、著者は戦後オキナワ文学者たちが一特に大城立裕の「カクテル・パーティー」と「ニライカナイの街」において一女性の身体(性と貞操)の毀損を「米軍の暴力的な占領システム」を想起させるジェンダ表象として配置していることを鋭く指摘する。

一方、著者は「復帰」以降のジェンダ表象の反転を中原晋の「銀のオートバイ」、下川博の「ロスからの愛の手紙」、喜舎場直子の「女綾織唄」の中で見出す。1970年代後半から米軍とオキナワ人女性の関係は加害者と被害者という二項対立を超えて、相互的な関係へと変貌された。著者は復帰以降の小説の中に「オキナワ人女性の「内面」が描かれ始めたのはもっとも重要な変化」だとし、ジェンダ表象の反転を意味づける。特に、「ジェンダ構図自体がアメリカと日本本土、そしてオキナワの間の政治」と深く関わっていることを論証している点は重要である。

このように孫知延の『戦後オキナワ文学を思惟する方法』は東アジアという枠組み自体を批評しながら、オキナワをめぐる戦後と冷戦の交差をさまざまなテクニクスを通して深く分析している。それは著者自らが問うているように、それが単にオキナワだけの問題ではなく、韓国における戦争と分断の矛盾と重なっているからこそ、実感と想像できた問題意識であるように思われる。著者は「オキナワ社会が直面した特殊な事情を東アジアという同時性の中で把握し、それをジェンダやエスニック、そしてアイデンティティという三つのスペクトラム」を通して解釈しようとしたと「はじめに」の中で書き記している。ここでは第四部「オキナワ戦闘と済州四・三、そして記憶闘争」と第五部「東アジアの平和と連帯に向かうオキナワ文学」には具体的にふれてないが、本書は著者の意図を超えて「東アジアという同時性」より広く読者に実感させている。本書によって韓国におけるオキナワ文学研究は日本文学研究という領域を超えて学際的研究に跳躍したと言えよう。

『戦後オキナワ文学を思惟する方法—ジェンダ・エスニック、そしてナショナルアイデンティティ』
(2020.4)